

アフリカの人々と名付け 1

「私は知らなかった」ちゃん——
妻が夫の不実を告発する碑銘としての名前

小馬 徹

アフリカの人々は一人で幾つもの、しかも不思議ないわれを持つ名前を持っている。それらの名前はどんな風に独特であり、且ついかなる仕方で命名の普遍性に繋ぎ留められているのか。何回かにわたって考えてみたい。

悪魔ちゃん事件と人の名付け

まず、名付けの普遍性から考えてみよう。我が国では、最近、我が子を悪魔と名付けようとした一人の父親が、暫くの間耳目を引き付けた。基本的には親権に属する命名権が社会によって制限されるべきかどうか。それが第一の争点だった。命名とは何か。我々は、更めて考えさせられたものである。

実はこの場合も、法的な決着が全てでもない。いや、むしろ「決着」は議論や思索に突然の停止を課す、一種の越権でさえあっただろう。

神の名付けと人の名付け

命名とは、子供自身、親、あるいは社会、そのいずれのためになされるのだろうか。はたして良い名前とは何なのだろうか。

これらは確かに重要な問だ。だが本質的には、何かを名付ける行為の意味それ自体が問われなければならない。命名とは、いわば神と人間だけがなし得る行為なのだから。

旧約聖書「創世記」は、神が光よあれと言った時に光が生まれたと書いて、言葉の力の本質を鋭く洞察している。ここでは、言葉はロゴス、即ち構造の同一性によって種々様々な対象物を括り、それらをもう一つの類として存在させる力として把握されている。同根のカタログという語の意味を想起すれば、ロゴスとしての言葉の力を理解し易いはずだ。

つまり名付けであるロゴスによって、初めて認識の対象が生み出され、本来どこにも切れ目のない流動体である自然が切りわけられ、一切の物が初めて存在を開始する。一人一人の赤ん坊は、言語を学びつつヒトから人間になる過程で、神の創造を自ら経験する。

旧約の神は、次いで光を昼、闇を夜と名付け、次々と世界の細部を創造して行く。これは、言葉によって自然を細かく切りわけて行く人間の言語活動の本質を写す比喻である。

やがて神は動物たちに名前を与えよとアダムに命ずる。これが人による第二の命名である。だがそれは、第一の命名とは根本的に異質である。既に存在しているものにラベルを貼ることに過ぎないからだ。

神の名付けとしてのわが子の命名

人間の日常の言語活動は、第二の命名の反復である。しかし、言葉の不自由さを思い、それを呵責ない桎梏と感じて、第一の命名を

夢見る時が必ず訪れる。例えば恋をする時。さにこの胸の内の「この思い」を伝えるには、出来合いの言葉はどんなに不適切だろう。人は言葉の約束を踏み越え、あてがわれた意味を出し抜いてでも我が胸の思いを伝えようとする。それが第一の命名たる詩の営みである。詩とは神の言葉で語ることだ。

そして、我が子の名付け。名付けられるのは赤ん坊一般ではなく、唯一無二のわが子だ。親たちは、「この胸の思い」をこの世でただ一人のわが子に贈り届けようと夢見る。

悪魔と命名した父親は、自ら悪魔たろうとしたのか。そうではない。わが子に唯一無二の名前を与えたかったのだ。それは、詩人となり、神になろうと望むことだ。

赤ん坊の命名に一定のリストからの選択を押しつけるか、自由を与えるか。それは文化の好みであり、社会の約束である。ヨーロッパでは名前はごく少数の聖人名を基本とし、変異の幅は狭く、前者に属する。日本では、制限付きの自由が与えられている。

そして、アフリカにこそ「神の名付け」が生きているのだ。変幻自在なアフリカの人々の名前の魅力と驚きはまさにそこにある。

子供に刻み付けるメッセージとしての名前

「呼ばれることによって人は作られる」のであり、人格としての自分を知るようになるのは自分の名前を通じてなのだ。とトルニエは言う（『なまえといのち』、1977）。これは、社会と文化を超えて普遍的な存在論的事実であるはずだ。それゆえ、世界中どこでも、親は子供の長生や人格形成への深い思いを込めて命名するに違いあるまい。

ところが梶茂樹は、ザイールのテンボ人の間では、「名前というのは本来、その子供とは何の関係もない」と言う（『アフリカを

フィールドワークする』、1993）。テンボには「私は知らなかった」という名の女の子が沢山いる。母親による命名で、もし夫がこんなにひどい人間だと知っていたら結婚しなかっただろうに……が、その含意なのだ。

「猿の（付けた）傷」という名もある。漁師は獲物の猿が猟犬に付けた傷ばかりにかまけ、猿が受けた致命傷は眼中にない。ある特定の人物に向けて、小うるさくする前に自分の仕打ちを考えてみるというメッセージを、この名前は伝えている。

手紙としての子供の名前

梶は、家族、夫婦、兄弟、隣人などの社会関係に即して「人は、あたかも手紙を書くように名前を付ける」と言い、これを「メッセージの『共時的伝達法』」と呼んでいる。ある家族は、「情け」（長男）、「疎外」（長女）、「心のつかえはとれた」（次男）、「財産」（次女）、「愛されること」（三女）、「黙る人」（四女）、「男」（三男）、「最後の人」（末子）と子供を名付けた。婚入した嫁は「疎外」で孤独を、「心のつかえはとれた」で出産した安堵を、「（夫に）愛されること」で妻としての正当性の主張を夫の家族に伝えようとした。

「男」には、性悪女の妻が引き起こすいざこざにも男は耐えるのだという夫の主張がある。「最後の人」は、末子ゆえの命名ではない。諺「今日の最後の方は明日の最後の人ではない」が「本歌」であり、今に見返してやるという貧しい父親の決意を表している。

メッセージとしての名前！ テンボ人の親は一篇の詩を、しかし屈折した詩をそれぞれの子供の名前に刻み込む。アフリカは広い。（こんま とおる 神奈川大学、社会人類学）